

目的 核家族化の進行が早まり、45年という短年月で高齢化率が0.9%にのった現今ひとびとは一抹の不安、期待、願望などをいだいて情報化社会の中で日々の生活を営んでいる。生活意識は時代の流れとともに変容するであろうと思われるので、本学短大生と保護者の傾向の現状を明らかにすることを目的として、両者同一調査内容で本調査を実施した。

方法 調査用紙を短大生に依頼し各家庭に配布。被調査者記録法により回答を依頼した。配布数196部、回収率89.8%。調査期間は昭和58年6月29日～7月9日とした。

結果 両者間で生活意識に違いが認められた領域は、核家族の概念で保護者はよく知っている、短大生は聞いた事はあるが実感として受けとめていない。家名の存続は保護者は子どもに継ぐ意志があったら継いでほしい、短大生は家名の存続にはこだわらないが祖先の扶養はしてほしい。同居は保護者はしてほしい、短大生はしたくない。同居の時期は保護者は結婚と同時に、短大生は介護が必要になったとき、いずれかが欠けたとき。老後に不安を感じない理由は保護者は我が家は同居が建前だから、短大生は収入があるからと6領域に認められた。両者同意識の領域は、核家族形態の否定。家庭の役割は精神安定の場。結婚の目的は二人の愛の結実のため。日常生活は健康第一。同居形態は同敷地内の別棟。別居親子の接触回数は週一回くらい、中間媒体物による接触手段はさけ直接訪問。老後の不安は健康のこと。同・別居を問わず子は親を扶養すべき。将来扶養される立場になったときは、家庭で家族による親子の精神的つながり（気くばり）がほしい。公営・民間施設の老人ホームのあることは十分承知しているが入所はしたくないなどの9領域に認められた。